

3年間の日本語教員養成課程の振り返り、これからの抱負

3年間、日本語教員養成課程を履修してきて、レポートやDVDを見るとたくさんの学びがありました。その中で、私が特に大事にしてきているなと感じたのは、日本語教師（教える立場の人）と学習者（学ぶ立場の人）の関係性です。なぜこう思ったのかというと、教師の言動で学習者のやる気が出たり、教室の雰囲気を作ったり、日本語を学ぶことの楽しさを知ったりと、「教師が学習者に与える影響は大きい」と感じる事ができたからです。

学習者が授業に必要なのは「やる気」で「教師がどんなに上手に教えることができて、学習者にやる気がないとうまくいかない」そして、「教師の言動が学習者にとって大きな影響を与える」ということを、日本語教員養成課程の授業で何度も学びました。学習者に対して、ただ知識を教えるだけでなく、「やる気を出させて知識を吸収させる」という役割も日本語教師に求められることを、日本語教育方法論の授業で気づくことができました。学習者のやる気の有無が学習成果に大きな影響を与えることを知り、自分が教師になった時に「自分がしている授業は学習者のやる気を引き出しているか」ということを第一に考えるようになりました。たしかに、自分が学習者の立場の時に、「これから先、役立つかもしれない」と思う時、学びたいというやる気が出ます。大切なのは、学びに入る前のやる気を出させるための授業の入り方だと思います。

3年次前期の実習授業で、中国のOさんとRさんに日本語を教えました。その中で、教師側の立場と、異国の言語を学習する学習者側の両方の立場で、授業のあり方について考えることができました。音声指導の時は、教師側である私たちが、「日本語をいかにわかりやすく理解してもらって、普段の生活で使えるようにする」、あるいは「役に立つと思ってもらうこと」を大事にして、授業を進めました。アクセントの問題で、2人にただ答えの正解だけを伝えるのではなく、正しいアクセントと間違ったアクセントの両方を発音し、2つの違いに気づいてもらえるようにしました。この方法は、効果的だったと思います。このように、日本語を素早く理解ができるような効果的な授業にしようと工夫することは、学習者自身が日本語の授業が「わかる」という達成感を生み、日本語学習の楽しさやもっと学びたいという意欲につながると、私は考えました。実際に私が英語を学習している時に、正解だけを与えられ、よく理解できなくてモヤモヤしたことがありました。学習者の立場から考えると、実際私が感じたように理解できないからやりたくなくなる、難しいと感じて壁を作ってしまう、といく方向につながってしまうと思います。このような経験を持っている私は、教師側に立って学習者としての立場と教師側の立場の両方の立場で考えることができました。このように、教師側の立場と学習者の側の立場の両方の立場を実感して授業のあり方を考えることで、「学習者の意欲が溢れている環境」で授業を進めていくことの大切さが分かってきました。

2つ目は、学習者の「やる気」を出させるための教師の「声」や「指名の工夫」の大切さについてです。自分が授業を行った時のDVDをはじめ見た時、「声」に張りがないと痛

感じました。「声」に張りがないと、聞き取りづらいことがあったり、学習者の声に負けて授業をスムーズに進められなかったりして、悪影響を及ぼすことがあります。自分の声量が自分で思うよりも小さいということに気づいたので、授業を行う際は、はっきりと元気よく発話しようと意識することができました。

「指名」についても、色々考えました。学習者の立場に立つと「自分自身が指名されて答えることができる」ということは、「授業内容をしっかり理解し、話を聞いているということ、先生にアピールする」ことを意味します。学習者のいろいろな反応を感じ取ることでできる観察力を持って、学習者にとって「やる気」の出るような指名をできるように、心がけなければなりません。指名をするときに一番気をつけたことは「質問をしてから、学習者の名前を呼ぶこと」です。最初に名前を呼んでしまうと、呼ばれなかった学習者が「自分には来ないや」と思ってしまいます。私は授業を行った時に、無意識に最初に名前を呼んで質問してしまっていることがありました。ランダム指名は「学習者を飽きさせず学習に取り組ませる効果的な方法」であるにもかかわらず、最初に名前を呼んで質問することで、その良さを台無しにはいけないと反省しました。

3つ目は、YMCAでの実習授業を通して、日本語を教えることの楽しさを、今までよりも一番感じる事ができたことです。日本語を教えることに対しての知識を、今までよりもたくさん持つことができました。YMCAのN先生の授業見学をして、表情、身振り、手振り、話し方、質問の聞き方、わかりやすいことばを使った伝え方など、必死にメモを取りました。その後、自分と比べ、授業に取り入れ、授業に還元できたと思います。自分一人では思いつかなかったことやどんなふうに言ったら伝わるのかと思っていたことなどを、他の実習生の授業から発見したりひらめいたりすることがありました。

教案づくりの大切さも実感することができました。設定している時間よりも押したりした時に、教案で時間設定をしていたので、臨機応変に対応できました。いざ教卓に立った時に、授業の進め具合など気にかけてながら、進めることができました。

これからの抱負

3年間、日本語教員養成課程を履修してきてたくさんの学びがあり、1年生の頃と比べると、ひとつひとつ着実に知識や技術を身につけてきたと実感しています。一番変わったのは、教卓に立つことの緊張度合いです。普段から、学習者として教卓とは反対側の景色を見えています。いざ教卓に立つと、「みんなから見られている」という気持ちになって緊張し、前に立って話すということに抵抗がありました。しかし今は、教卓に立って学習者にどのように言えば伝わるのか考えたり、1人1人の表情を見てアイコンタクトをしたりしています。学習者が自分の思っている以上のことを発言してきても、その発言のおもしろさを感じることができています。これから先、人前に立って何かを話す時は、この感覚を忘れないようにして前に立ちたいと思います。さらに、「緊張についてどう対処していけばいいのか」について、横溝先生や他の実習生との話し合いの中で、「自分が何で緊張しているのか考えると

緊張がおさまる」ということがわかりました。緊張の向き合い方について新しく知ることができたことは、これから今の自分よりも成長するためのとても大きな学びでした。これから、面接や部活動や社会に出るときに、この学びを生かしていきたいと思います。今までひとつひとつ吸収してきた知識は、自分 1 人では気づくことができませんでした。日本語教員養成課程を履修してきたからこそ成長できた私がいます。これからの次のステップに、つなげていきます。